

びわこの 考湖学

「武士(ものぶ)のやば
せの舟は早くとも急がば廻れ
瀬田の長橋」という歌があり

ます。これは後世、琵琶湖を
横断する水路の方が近くて早
いが、大回りでも水難のない
瀬田橋を経由した方が安全、
確実だと詠んだものだと思
われました。よく知られてい
る諺、「急がば回れ」の原形
なのです。

「瀬田へ回れば三里の回り
ござれ矢橋の舟にのろ」と
いう歌もあります。「急がば
回れ」とは正反対で、回り道
をするべからぬなら船に乗った
方が早くて便利だという水運
業者のコマーシャルソングな
のです。

これらは、大津松本―矢橋
・志那ルートの水路と瀬田橋
經由の陸路の在り方からくる
諺、俗語です。陸路に比べる
と風待ちなどの不便さはある
ものの、楽で速い湖上交通の
方が一般的だったという、発
達した湖上交通を端的に示す
ものなのです。

このように、個人的な旅行
の際には、水路を用いること
が多かったことがわかります

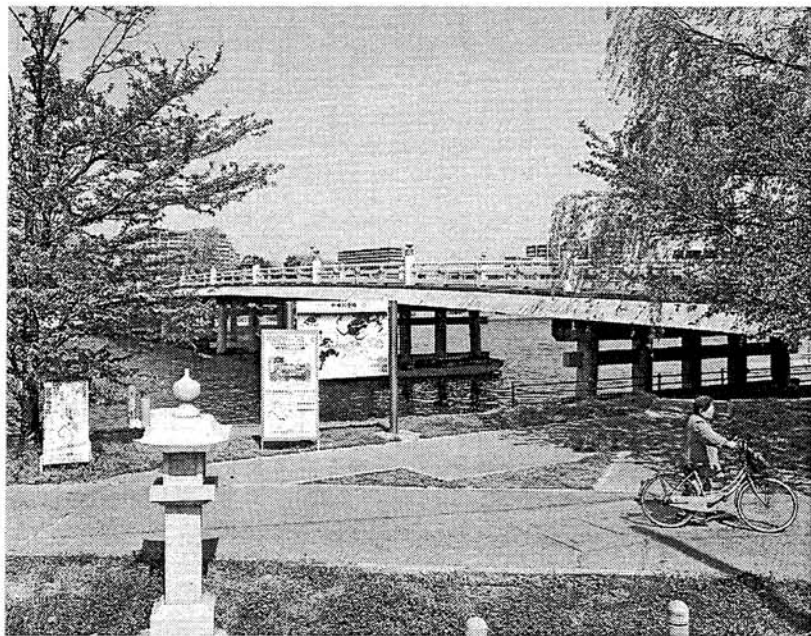
が、大人数の移動にはどちら
を用いたのでしょうか。

まず、京都と伊勢を往来し
た伊勢斎王群行は、瀬田橋を
渡りました。瀬田橋が破損し
ているときには、船で浮橋を
つくって渡ることもありまし
た。軍事では、壬申の乱から
本能寺の変に至るまで瀬田橋
をめぐる攻防が繰り返されま
したし、東から西、西から東
に大軍が移動する際には瀬田
橋を経由して行軍することが
一般的でした。

そういった利用が前提だっ
たこともあり、維持管理は民
間ではなく、国家もしくは幕
府、近江国守護などが行って
きたのでした。つまり、瀬田
橋の維持は、国家などが威信
をかけて行う事業だったので
す。では、なぜ軍事行動には
舟を用いなかったのでしょうか。
それは、琵琶湖の湊の特
質によると考えられます。

琵琶湖の南半分(南湖)

瀬田の唐橋 その3



日本史のなかで重要な役割を果たしてきた瀬田の唐橋―大津市

は、水深が浅く大型の船舶を
係留することが困難で、当時
湖上を走っていたのは小規模
な舟でした。更には「八十
湊」と呼ばれるように、湖畔
には統率されていない中小の
湊が群立していました。つま
り、舟で大人数が一斉に移動
しようとする、方々の湊に
声をかけて舟を1カ所に集結

させるという非常に面倒なこ
とが求められたのでした。
仮に、数艘の舟で大勢の敵
のいる対岸へとピストン輸送
したならばどうなるでしょう
か。着岸するやいなや、敵兵
に囲まれてしまったに違いあ
りません。

では、北畠顕家、斯波義
寛、徳川家康は、なぜ舟をで

軍事行動ができたのでし
ょうか。共通する理由は、すでに
終戦段階で対岸に敵が存在し
なかったことに加え、俊敏な
移動を前提としなかったこと
です。

このように、瀬田橋を渡っ
た人々と渡らなかつた人々を
みることに、琵琶湖の東
西をめぐる交通がどのように
位置づけられていたかが分か
ります。

琵琶湖は、都と東国間にあ
る非常に重要な防衛線であ
った。その上、小規模な湊が群
立しているの、戦乱のさな
かには舟を用いての一斉移動
が困難です。そのため軍勢
は、東からも西からも瀬田橋
を通過しようとしたのでし
た。

その結果、都と東国をめ
ぐる戦いでは、瀬田橋が主戦場
のひとつとなってきました。
まさに、「瀬田橋を制するも
のは天下を制す」のです。一
方で軍事行動や公式の儀礼的
な旅以外は、「瀬田へ回れば三
里の回り」とばかりに舟で移
動することが一般的でした。

(滋賀県文化財保護協会
畑中英二)

陸路か水路か 「急がば回れ」